

齒車

芥川竜之介

青空文庫

一 レエン・コオト

僕は或知り人の結婚披露式につらなる為ために鞆かばんを一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の両がわは大抵松ばかり茂っていた。上り列車に間に合うかどうかは可かなり也怪しいのに違いなかった。自動車には丁度僕の外に或理髪店の主人も乗り合せていた。彼は棗なつめのようにまると肥った、短い鬚あごひげの持ち主だった。僕は時間を気にしながら、時々彼と話をした。

「妙なこともありますね。××さんの屋敷には昼間でも幽霊が出

るって云うんですが」

「昼間でもね」

僕は冬の西日の当った向うの松山を眺めながら、善い加減に調子を合せていた。

「尤も^{もつと}天氣の善い日には出ないそうです。一番多いのは雨のふる日だって云うんですが」

「雨の降る日に濡れに来るんじゃないか？」

「御常談で。……しかしレエン・コオトを着た幽霊だって云うんです」

自動車はラツパを鳴らしながら、或停車場へ横着けになった。

僕は或理髮店の主人に別れ、停車場の中へは行って行つた。する

と果して上り列車は二三分前に出たばかりだった。待合室のベンチにはレエン・コオトを着た男が一人ぼんやり外を眺めていた。僕は今聞いたばかりの幽霊の話の思い出した。が、ちよつと苦笑したぎり、とにかく次の列車を待つ為に停車場前のカツフェエはいることにした。

それはカツフェエと云う名を与えるのも考えものに近いカツフェエだった。僕は隅のテエブルに坐り、ココアを一杯ちゆうもん註文した。テエブルにかけたオイル・クロオスは白地に細い青の線を荒い格こ子うしに引いたものだった。しかしもう隅々には薄汚いカンヴァスを露あらわしていた。僕は膠にかわ臭いココアを飲みながら、人げのないカツフェエの中を見まわした。埃ほこりじみたカツフェエの壁には「親子丼おやこどんぶり」

だの「カツレツ」だのと云う紙札が何枚も貼^はつてあつた。

「地玉子、オムレツ」

僕はこう云う紙札に東海道線に近い田舎を感じた。それは麦畑やキャベツ畑の間に電気機関車の通る田舎だった。……

次の上り列車に乗つたのはもう日暮に近い頃だった。僕はいつも二等に乗っていた。が、何かの都合上、その時は三等に乗ることにした。

汽車の中は可也こみ合っていた。しかも僕の前後にいるのは大^お

磯^{おいそ}かどこかへ遠足に行つたらしい小学校の女生徒ばかりだった。

僕は巻煙草に火をつけながら、こう云う女生徒の群れを眺めていた。彼等はいずれも快活だった。のみならず殆どしやべり続けだ

った。

「写真屋さん、ラヴ・シインって何？」

やはり遠足について来たらしい、僕の前にいた「写真屋さん」は何とかお茶を濁していた。しかし十四五の女生徒の一人はまだいろいろのことを問いかけていた。僕はふと彼女の鼻に蓄膿ちくのうしょ症しょうのあることを感じ、何か頬笑ほほえまずにはいられなかった。それから又僕の隣りにいた十二三の女生徒の一人は若い女教師の膝ひざの上うへに坐り、片手に彼女の頸くびを抱きながら、片手に彼女の頬をさすつていた。しかも誰かと話す合あい間に時々こう女教師に話しかけていた。

「可愛いわね、先生は。可愛い目をしていらっしやるわね」

彼等は僕には女生徒よりも一人前の女と云う感じを与えた。林檎りんごを皮ごと噛かじっていたり、キヤラメルの紙を剥むいていることを除けば。……しかし年かさらしい女生徒の一人は僕の側を通る時に誰かの足を踏んだと見え、「御免なさいまし」と声をかけた。彼女だけは彼等よりもませているだけに反かえつて僕には女生徒らしかった。僕は巻煙草くわを啣くわえたまま、この矛盾を感じた僕自身を冷笑しない訣わけには行かなかつた。

いつか電燈をともした汽車はやつと或郊外の停車場へ着いた。僕は風の寒いプラットホームへ下り、一度橋を渡った上、省線電車の来るのを待つことにした。すると偶然顔を合せたのは或会社にいるT君だった、僕等は電車を待っている間に不景氣のことな

どを話し合つた。T君は勿論僕などよりもこう云う問題に通じていた。が、^{たくま}遅しい彼の指には余り不景気には縁のない^{トルコ}土耳其石の指環^{ゆびわ}も嵌^はまつていた。

「大したものを嵌めているね」

「これか？　これはハルビンへ商売に行つていた友だちの指環を買わされたのだよ。そいつも今は往生している。コオペラティヴと取引が出来なくなったものだから」

僕等の乗つた省線電車は幸いにも汽車ほどこんでいなかった。僕等は並んで腰をおろし、いろいろのことを話していた。T君はついこの春に^{パリ}巴里にある勤め先から東京へ帰つたばかりだった。従つて僕等の間には巴里の話も出勝ちだった。カイヨオ夫人の話、

蟹料理かにの話、御外遊中の或殿下の話、……

「仏蘭西フランスは存外困つてはいないよ、唯元来仏蘭西人と云うやつは税を出したからない国民だから、内閣はいつも倒れるがね。……」

「だってフランスは暴落するしさ」

「それは新聞を読んでいればね。しかし向うにいて見給え。新聞紙上の日本なるものはのべつ大地震や大洪水があるから」

するとレエン・コオトを着た男が一人僕等の向うへ来て腰をおろした。僕はちよつと無気味になり、何か前に聞いた幽霊の話をT君に話したい心もちを感じた。が、T君はその前に杖の柄をくると左へ向け、顔は前を向いたまま、小声に僕に話しかけた。

「あすこに女が一人いるだろう？ 鼠色の毛糸のシヨオルをした、

……」

「あの西洋髪に結った女か？」

「うん、風呂敷包みを抱えている女さ。あいつはこの夏は軽井沢にいたよ。ちよつと洒落しゃれた洋装などをしてね」

しかし彼女は誰の目にも見すばらしいなりをしているのに違いなかった。僕はT君と話しながら、そつと彼女を眺めていた。彼女はどこか眉の間に気違いらしい感じのする顔をしていた。しかもその又風呂敷包みの中から豹ひょうに似た海綿をはみ出させていた。「軽井沢にいた時には若い亜米利加人アメリカと踊つたりしていたっけ。モダアン……何と云うやつかね」

レエン・コオトを着た男は僕のT君と別れる時にはいつかそこ

にいらなくなっていた。僕は省線電車の或停車場からやはり鞆をぶら下げたまま、或ホテルへ歩いて行つた。往來の両側に立つているのは大抵大きいビルディングだつた。僕はそこを歩いているうちにふと松林を思い出した。のみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？——と云うのは絶えずまわつてゐる半透明の齒車だつた。僕はこう云う経験を前にも何度か持ち合せていた。齒車は次第に数を殖やし、半ば僕の視野を塞いでしまふ、が、それも長いことではない、暫らくの後には消え失せる代りに今度は頭痛を感じはじめ、——それはいつも同じことだつた。眼科の医者はこの錯覚(?)の為に度々僕に節煙を命じた。しかしこう云う齒車は僕の煙草に親したしまない二十前はたちにも見えないこ

とはなかった。僕は又はしまったなと思い、左の目の視力をためす為に片手に右の目を塞いで見た。左の目は果して何ともなかった。しかし右の目の^{まぶた}瞼の裏には歯車が幾つもまわっていた。僕は右側のビルディングの次第に消えてしまうのを見ながら、せつせと往来を歩いて行つた。

ホテルの玄関をはいつた時には歯車ももう消え失せていた。が、頭痛はまだ残っていた。僕は外^{がいとう}套や帽子を預ける^{ついで}次手に部屋を一つとつて貰うことにした。それから或雑誌社へ電話をかけて金のことを相談した。

結婚披露式の^{ばんさん}晩餐はとうに始まつていたらしかつた。僕はテブルの隅に坐り、ナイフやフォークを動かして出した。正面の新

郎や新婦をはじめ、白い凹字形おうのテエブルに就いた五十人あまりの人びとは勿論いずれも陽気だった。が、僕の心もちは明るい電燈の光の下にだんだん憂鬱になるばかりだった。僕はこの心もちを遁のがれる為に隣にいた客に話しかけた。彼は丁度獅子ししのように白い頬ほおひげ鬚を伸ばした老人だった。のみならず僕も名を知っていた或名高い漢学者だった。従つて又僕等の話はいつか古典の上へ落ちて行つた。

「麒麟きりんはつまり一角獣ですね。それから鳳凰ほうおうもフェニックスと云う鳥の、……」

この名高い漢学者はこう云う僕の話にも興味を感じているらしかった。僕は機械的にしゃべっているうちにだんだん病的な破壊

慾を感じ、堯舜ぎようしゆんを架空の人物にしたのは勿論、「春秋しゆんじゆう」の著者もずっと後の漢代の人だったことを話し出した。するとこの漢学者は露骨に不快な表情を示し、少しも僕の顔を見ずに殆ど虎の唸うなるように僕の話わを截きり離した。

「もし堯舜もいなかったとすれば、孔子は讒うそをつかれたことになる。聖人の讒をつかれる筈はない」

僕は勿論黙ってしまった。それから又皿の上の肉へナイフやフォークを加えようとした。すると小さい蛆うじが一匹静かに肉の縁に蠢うごめいていた。蛆は僕の頭の中に Worn と云う英語を呼び起した。それは又麒麟や鳳凰のように或伝説的動物を意味している言葉にも違いなかった。僕はナイフやフォークを置き、いつか僕の

杯にシャンパアニユのつがれるのを眺めていた。

やっと晚餐のすんだ後、僕は前にとって置いた僕の部屋へこもる為にひとげ人気のない廊下を歩いて行つた。廊下は僕にはホテルよりも監獄らしい感じを与えるものだった。しかし幸いにも頭痛だけはいつの間にか薄らいでいた。

僕の部屋には鞆は勿論、帽子や外套も持つて来てあつた。僕は壁にかけた外套に僕自身の立ち姿を感じ、急いでそれを部屋の隅の衣裳戸いしやうとだな柵の中へほう抛りこんだ。それから鏡台の前へ行き、じつと鏡に僕の顔を映した。鏡に映つた僕の顔は皮膚の下の骨組みを露わしていた。蛆はこう云う僕の記憶に忽ちはつきり浮び出した。僕は戸をあけて廊下へ出、どこと云うことなしに歩いて行つた。

するとロツビイへ出る隅に緑いろの笠をかけた、脊せいの高いスタン
ドの電燈が一つ硝子戸ガラスに鮮あざやかに映っていた。それは何か僕の心に
平和な感じを与えるものだった。僕はその前の椅子に坐り、いろ
いろのことを考えていた。が、そこにも五分とは坐っている訣に
行かなかつた。レエン・コオトは今度もまた僕の横にあつた長椅
子の背に如何いかにもだらりと脱ぎかけてあつた。

「しかも今は寒中だと云うのに」

僕はこんなことを考えながら、もう一度廊下を引き返して行つ
た。廊下の隅の給仕だまりには一人も給仕は見えなかつた。しか
し彼等の話し声はちよつと僕の耳をかすめて行つた。それは何と
か言われたのに答えた All right と云う英語だった。「オオル・ラ

イト」？——僕はいつかこの対話の意味を正確に掴つかもうとあせっていた。「オオル・ライト」？ 「オオル・ライト」？ 何が一体オオル・ライトなのであろう？

僕の部屋は勿論ひっそりしていた。が、戸をあけてはいることは妙に僕には無気味だった。僕はちよつとためらった後、思い切つて部屋の中へはいつて行つた。それから鏡を見ないようにし、机の前の椅子に腰をおろした。椅子は蜥蜴とかげの皮に近い、青いマロツク皮の安楽椅子だった。僕は鞆をあけて原稿用紙を出し、或短篇を続けようとした。けれどもインクをつけたペンはいつまでたつても動かなかつた。のみならずやつと動いたと思うと、同じ言葉ばかり書きつづけていた。All right……All right……All right sir

……All right……

そこへ突然鳴り出したのはベッドの側にある電話だった。僕は驚いて立ち上り、受話器を耳へやって返事をした。

「どなた？」

「あたしです。あたし……」

相手は僕の姉の娘だった。

「何だい？　どうかしたのかい？」

「ええ、あの大へんなことが起ったんです。ですから、……大へんなことが起ったもんですから。今叔母さんにも電話をかけたんです」

「大へんなこと？」

「ええ、ですからすぐに来て下さい。すぐにですよ」

電話はそれぎり切れてしまった。僕はもとのように受話器をかけ、反射的にベルの鈕ボタンを押した。しかし僕の手の震えていることは僕自身はつきり意識していた。給仕は容易にやって来なかつた。僕は苛いらだ立たしさよりも苦しさを感じ、何度もベルの鈕を押した。やつと運命の僕に教えた「オオル・ライト」と云う言葉を了解しながら。

僕の姉の夫はその日の午後、東京から余り離れていない或田舎に轢死れきししていた。しかも季節に縁のないレエン・コオトをひっかけていた。僕はいまもそのホテルの部屋に前の短篇を書きつづけている。真夜中の廊下には誰も通らない。が、時々戸の外に翼の

音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてあるのかも知れない。

二 復讐

僕はこのホテルの部屋に午前八時頃に目を醒さました。が、ベッドをおりようとすると、スリッパは不思議にも片っぽしかなかった。それはこの一二年の間、いつも僕に恐怖だの不安だのを与える現象だった。のみならずサンダアルを片っぽだけはいたギリシ臘ヤ神話の中の王子を思い出させる現象だった。僕はベルを押し、給仕を呼び、スリッパの片っぽを探して貰うことにした。給

仕はげげんな顔をしながら、狭い部屋の中を探しまわった。

「ここにありました。このバスの部屋の中に」

「どうして又そんな所に行っていたのだろうか？」

「さあ、鼠かも知れません」

僕は給仕の退いた後、牛乳を入れない珈琲を飲み、前の小説

を仕上げにかかった。凝灰岩を四角に組んだ窓は雪のある庭に向

っていた。僕はペンを休める度にぼんやりとこの雪を眺めたりし

た。雪は蒼つぼみを持った沈しん丁ちやう花げの下に都会の煤ばい煙えんによごれていた。

それは何か僕の心に傷いたましさを与える眺めだった。僕は巻煙草を

ふかしながら、いつかペンを動かさずにいろいろのことを考えて

いた。妻のことを、子供たちのことを、なかんずく就中なかんずく姉の夫のことを。

…

姉の夫は自殺する前に放火の嫌疑を蒙こうむっていた。それもまた実際仕かたはなかった。彼は家の焼ける前に家の価格に二倍する火災保険に加入していた。しかも偽証罪を犯した為に執行猶予中の体になっていた。けれども僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京へ帰る度に必ず火の燃えるのを見たことだった。僕は或あるいは汽車の中から山を焼いている火を見たり、或は又自動車の中から（その時は妻子とも一しよだった）常磐橋界隈ときわばしかいわいの火事を見たりしていた。それは彼の家の焼けない前にもおのずから僕に火事のある予感を与えない訣には行かなかつた。

「今年家は家が火事になるかも知れないぜ」

「そんな縁起の悪いことを。……それでも火事になったら大変です。保険は碌ろくについていないし、……」

僕等はそんなことを話し合ったりした。しかし僕の家は焼けずに、——僕は努めて妄想もうぞうを押しつけ、もう一度ペンを動かさそうとした。が、ペンはどうしても一行とは楽に動かなかつた。僕はどうとう机の前を離れ、ベッドの上に転がったまま、トルストイの Polikouchka を読みはじめた。この小説の主人公は虚栄心や病的傾向や名誉心の入り交った、複雑な性格の持ち主だった。しかも彼の一生の悲喜劇は多少の修正を加えさえすれば、僕の一生の力リカテユアだった。殊に彼の悲喜劇の中に運命の冷笑を感じるのは次第に僕を無気味にし出した。僕は一時間とたたないうちに

ベッドの上から飛び起きるが早いか、窓かけの垂れた部屋の隅へ力一ぱい本を抛ほうりつけた。

「くたばってしまえ！」

すると大きい鼠が一匹窓かけの下からバスの部屋へ斜めに床の上を走って行った。僕は一足飛びにバスの部屋へ行き、戸をあけて中を探しまわった。が、白いタツブのかげにも鼠らしいものは見えなかった。僕は急に無気味になり、慌あわててスリッパを靴に換えると、人ひと気のない廊下を歩いて行った。

廊下はきょうも不あいかわ相わらず変ろ牢ろう獄ごくのように憂鬱あがだった。僕は頭を垂れたまま、階段を上あがつたり下りたりしているうちにいつかコック部屋へはいつていた。コック部屋は存外明るかった。が、片側

に並んだ竈かまどは幾つも炎を動かしていた。僕はそこを通りぬけながら、白い帽をかぶったコックたちの冷やかに僕を見ているのを感じた。同時に又僕の墮おちた地獄を感じた。「神よ、我を罰し給え。怒り給うこと勿なれ。恐らくは我滅びん」——こう云う祈きとう禱もこの瞬間にはおのずから僕の脣くちびるにのぼらない訣には行かなかつた。

僕はこのホテルの外へ出ると、青ぞらの映つた雪解けの道をせつせと姉の家へ歩いて行つた。道に沿うた公園の樹木は皆枝や葉を黒ませていた。のみならずどれ一本ごとに丁度僕等人間のように前や後ろを具そなへていた。それもまた僕には不快よりも恐怖に近いものを運んで来た。僕はダンテの地獄の中にある、樹木になつた魂を思い出し、ビルディングばかり並んでいる電車線路の向

うを歩くことにした。しかしそこも一町とは無事に歩くことは出来なかつた。

「ちよつと通りがかりに失礼ですが、……」

それは金きんボタン鈕のの制服を着た二十二三の青年だつた。僕は黙つてこの青年を見つめ、彼の鼻の左の側わきに黒子ほくろのあることを発見した。彼は帽を脱いだまま、怯おず怯おずこう僕に話しかけた。

「Aさんではいらつしやいませんか？」

「そうです」

「どうもそんな気がしたものですから、……」

「何か御用ですか？」

「いえ、唯お目にかかりたかつただけです。僕も先生の愛読者の

……」

僕はもうその時にはちよつと帽をとつたぎり、彼を後ろに歩き出してゐた。先生、A先生、——それは僕にはこの頃で最も不快な言葉だった。僕はあらゆる罪惡を犯していることを信じていた。しかも彼等は何かの機会に僕を先生と呼びつづけていた。僕はそこに僕を嘲る何ものかを感じずにはいられなかつた。何ものかをあざけ？——しかし僕の物質主義は神秘主義を拒絶せずにはいられなかつた。僕はつい二三箇月前にも或小さい同人雑誌にこう云う言葉を發表してゐた。——「僕は芸術的良心を始め、どう云う良心も持っていない。僕の持っているのは神経だけである」……

姉は三人の子供たちと一しよに露地の奥のバラックに避難して

いた。褐色の紙を貼ったバラックの中は外よりも寒いくらいだった。僕等は火鉢に手をかざしながら、いろいろのことを話し合っていた。体の逞たくましい姉の夫は人一倍瘦やせ細った僕を本能的に軽蔑けいべつしていた。のみならず僕の作品の不道徳であることを公言していた。僕はいつも冷やかにこう云う彼を見おろしたまま、一度も打ちつけて話したことはなかった。しかし姉と話しているうちにだんだん彼も僕のように地獄に堕ちていたことを悟り出した。彼は現に寝台車の中に幽霊を見たとか云うことだった。が、僕は巻煙草に火をつけ、努めて金かねのことばかり話しつづけた。

「何しろこう云う際だしするから、何もかも売ってしまおうと思うの」

「それはそうだ。タイプライターなどは幾らかになるだろう」

「ええ、それから画などもあるし」

「次手ついでにNさん（姉の夫）の肖像画も売るか？　しかしあれは：

…」

僕はバラツクの壁にかけて、額縁のない一枚のコンテ画を見ると、迂濶うかつに常談も言われな**い**のを感じた。轢死した彼は汽車の為に顔もすつかり肉塊になり、僅かに唯口くちひげ髭だけ残っていたとか云うことだった。この話は勿論話自身も薄気味悪いのに違いなかった。しかし彼の肖像画はどこも完全に描いてあるものの、口髭だけはなぜかぼんやりしていた。僕は光線の加減かと思ひ、この一枚のコンテ画をいろいろの位置から眺めるようにした。

「何をしているの？」

「何でもないよ。……唯あの肖像画は口のまわりだけ、……」

姉はちよつと振り返りながら、何も気づかないように返事をした。

「髭だけ妙に薄いようでしょう」

僕の見たものは錯覚ではなかった。しかし錯覚ではないとすれば、——僕は午ひるめし飯の世話にならないうちに姉の家を出ることにした。

「まあ、善いでしよう」

「又あしたでも、……きようは青山まで出かけるのだから」

「ああ、あすこ？　まだ体の具合は悪いの？」

「やつぱり薬ばかり嘸のんでいる。催眠薬だけでも大変だよ。ヴェロナアル、ノイロナアル、トリオナル、ヌマアル……」

三十分ばかりたった後、僕は或ビルディングへはいり、昇降機リフトに乗って三階へのぼった。それから或レストオランの硝子戸を押してはいろいろとした。が、硝子戸は動かなかつた。のみならずそこには「定休日」と書いた漆塗りの札も下つていた。僕は愈いよいよ不快になり、硝子戸の向うのテエブルの上に林檎りんごやバナナを盛つたのを見たまま、もう一度往来へ出ることにした。すると会社員らしい男が二人何か快活にしゃべりながら、このビルディングにはいる為ために僕の肩をこすつて行つた。彼等の一人はその拍子に「イライラしてね」と言つたらしかつた。

僕は往来に佇たたずんだなり、タクシイの通るのを待ち合せていた。

タクシイは容易に通らなかつた。のみならずたまに通つたのは必ず黄いろい車だつた。（この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としていた）そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ、とにかく青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。

「イライラする、——tantalizing——Tantalus——Inferno……」

タンタルスは実際硝子戸越しに果物を眺めた僕自身だつた。僕は二度も僕の目に浮んだダンテの地獄を詛のろいながら、じつと運転手の背中を眺めていた。そのうちに又あらゆるものの謔であることを感じ出した。政治、実業、芸術、科学、——いずれも皆こう

云う僕にはこの恐しい人生を隠した雑色のエナメルに外ならなかつた。僕はだんだん息苦しきを感じ、タクシイの窓をあけ放つた。が、何か心臓をしめられる感じは去らなかつた。

緑いろのタクシイはやっと神宮前へ走りかかった。そこには或精神病院へ曲る横町が一つある筈だつた。しかしそれもきようだけはなぜか僕にはわからなかつた。僕は電車の線路に沿い、何度もタクシイを往復させた後、とうとうあきらめておりることにした。

僕はやっとその横町を見つけ、ぬかるみの多い道を曲つて行つた。するといつか道を間違え、青山斎場の前へ出てしまった。それはかれこれ十年前にあつた夏目先生の告別式以来、一度も僕は

門の前さえ通ったことのない建物だった。十年前の僕も幸福ではなかった。しかし少くとも平和だった。僕は砂利を敷いた門の中を眺め、「漱石山房」の芭蕉を思い出しながら、何か僕の一歩も一段落ついたことを感じない訣には行かなかった。のみならずこの墓地の前へ十年目に僕をつれて来た何ものかを感じない訣にも行かなかった。

或精神病院の門を出た後、僕は又自動車に乗り、前のホテルへ帰ることにした。が、このホテルの玄関へおけると、レエン・コオトを着た男が一人何か給仕と喧嘩けんかをしていた。給仕と？——いや、それは給仕ではない、緑いろの服を着た自動車掛りだった。僕はこのホテルへはいることに何か不吉な心もちを感じ、さっさ

ともとの道を引き返して行つた。

僕の銀座通りへ出た時にはかれこれ日の暮も近づいていた。僕は両側に並んだ店や目まぐるしい人通りに一層憂鬱にならずにはいられなかつた。殊に往来の人々の罪などと云うものを知らないように軽快に歩いているのは不快だつた。僕は薄明るい外光に電燈の光のまじつた中をどこまでも北へ歩いて行つた。そのうちに僕の目を捉とらえたのは雑誌などを積み上げた本屋だつた。僕はこの本屋の店へはいり、ぼんやりと何段かの書棚を見上げた。それから「希臘ギリシヤ神話」と云う一冊の本へ目を通すことにした。黄いろい表紙をした「希臘神話」は子供の為に書かれたものらしかつた。けれども偶然僕の読んだ一行は忽ち僕を打ちのめした。

「一番偉いツオイスの神でも復讐ふくしゅうの神にはかないません。…」

僕はこの本屋の店を後ろに人ごみの中を歩いて行った。いつか曲り出した僕の背中に絶えず僕をつけ狙っている復讐の神を感じながら。…

三夜

僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの「伝説」を見つけ、二三頁ずつ目を通した。それは僕の経験と大差のないことを書いたものだった。のみならず黄いろい表紙をしていた。僕は「伝説」

を書棚へ戻し、今度は殆ど手当り次第に厚い本を一冊引きずり出した。しかしこの本も挿し画さえの一枚に僕等人間と変りのない、目鼻のある齒車ばかり並べていた。(それは或独逸人ドイツの集めた精神病者の画集だった)僕はいつか憂鬱の中に反抗的精神の起るのを感じ、やぶれかぶれになった賭博狂とばきようのようにいろいろの本を開いて行つた。が、なぜかどの本も必ず文章か挿し画かの中に多少の針を隠していた。どの本も?——僕は何度も読み返した「マダム・ボヴァリイ」を手にとつた時さえ、ひつきよう畢 竟 僕自身も中産階級のムツシウ・ボヴァリイに外ならないのを感じた。……

日の暮に近い丸善の二階には僕の外に客もないらしかつた。僕は電燈の光の中に書棚の間をさまよつて行つた。それから「宗教」

と云う札を掲げた書棚の前に足を休め、緑いろの表紙をした一冊の本へ目を通した。この本は目次の第何章かに「恐しい四つの敵——疑惑、恐怖、驕きょうまん慢、官能的欲望」と云う言葉を並べていた。僕はこう云う言葉を見るが早いか、一層反抗的精神の起るのを感じた。それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかつた。が、伝統的精神もやはり近代的精神のようにはやはり僕を不幸にするのは愈いよいよ僕にはたまらなかつた。僕はこの本を手にしたまま、ふといつかペン・ネームに用いた「寿陵余子じゆりようし」と云う言葉を思い出した。それは邯鄲かんたんの歩みを学ばないうちに寿陵の歩みを忘れてしまい、蛇行匍匐だこうほふくして帰郷したと云う「韓非子かんぴし」中の青年だつた。今日こんにち日の僕は誰の目にも

「寿陵余子」であるのに違いなかった。しかしまだ地獄へ墮ちなかつた僕もこのペン・ネームを用いていたことは、——僕は大きい書棚を後ろに努めて妄想を払うようにし、丁度僕の向うにあつたポスタアの展覧室へはいつて行つた。が、そこにも一枚のポスタアの中には聖ジヨオジらしい騎士が一人翼のある竜を刺し殺していた。しかもその騎士は兜かぶとの下に僕の敵の一人に近いしかめ面を半ば露あらわしていた。僕は又「韓非子」の中の屠とり竜ゆうの技の話の思ひ出し、展覧室へ通りぬけずに幅の広い階段を下つて行つた。

僕はもう夜になつた日本橋通りを歩きながら、屠竜と云う言葉を考えつづけた。それは又僕の持っている硯すざりの銘にも違いなかつた。この硯を僕に贈つたのは或若い事業家だつた。彼はいろいろ

の事業に失敗した揚句、とうとう去年の暮に破産してしまった。僕は高い空を見上げ、無数の星の光の中にどのくらいこの地球の小さいかと云うことを、——従ってどのくらい僕自身の小さいかと云うことを考えようとした。しかし昼間は晴れていた空もいつかもうすっかり曇っていた。僕は突然何ものかの僕に敵意を持っているのを感じ、電車線路の向うにある或カツフェへ避難することにした。

それは「避難」に違いなかった。僕はこのカツフェの薔薇ばら色の壁に何か平和に近いものを感じ、一番奥のテーブルの前にやつと楽々と腰をおろした。そこには幸い僕の外に二三人の客のあるだけだった。僕は一杯のココアを啜すすり、ふだんのように巻煙草をふ

かし出した。巻煙草の煙は薔薇色の壁へかすかに青い煙を立ちのぼらせて行った。この優しい色の調和もやはり僕には愉快だった。けれども僕は暫らくの後、僕の左の壁にかけたナポレオンの肖像画を見つけ、そろそろ又不安を感じ出した。ナポレオンはまだ学生だった時、彼の地理のノオト・ブックの最後に「セエント・ヘレナ、小さい島」と記していた。それは或は僕等の言うように偶然だったかも知れなかった。しかしナポレオン自身にさえ恐怖を呼び起したのは確かだった。……

僕はナポレオンを見つめたまま、僕自身の作品を考え出した。するとまず記憶に浮かんだのは「侏儒しゅじゆの言葉」の中のアフオリズムだった。（殊に「人生は地獄よりも地獄的である」と云う言

葉だった）それから「地獄変」の主人公、——良秀よしひでと云う画師えしの運命だった。それから……僕は巻煙草をふかしながら、こう云う記憶から逃のがれる為にこのカツフエの中を眺めまわした。僕がここへ避難したのは五分もたたない前のことだった。しかしこのカツフエは短時間の間にすっかり容ようす子を改めていた。就なかんずく中僕を不快にしたのはマホガニイまがいの椅子やテエブルの少しもあたるの薔薇色の壁と調和を保っていないことだった。僕はもう一度人目に見えない苦しみの中に落ちこむのを恐れ、銀貨を一枚投げ出すそうそうが早いそうそうか、々このカツフエを出ようとした。

「もし、もし、二十銭頂きますが、……」

僕の投げ出したのは銅貨だった。

僕は屈辱を感じながら、ひとり往來を歩いているうちにふと遠い松林の中にある僕の家を思い出した。それは或郊外にある僕の養父母の家ではない、唯僕を中心にした家族の為に借りた家だった。僕はかれこれ十年前ぜんにもこう云う家に暮らしていた。しかし或事情の為に輕率にも父母と同居し出した。同時に又奴隷に、暴君に、力のない利己主義者に変り出した。……

前のホテルに歸つたのはもうかれこれ十時だった。ずっと長い途みちを歩いて来た僕は僕の部屋へ歸る力を失い、太い丸太の火を燃やした炉の前の椅子に腰をおろした。それから僕の計画していた長篇のことを考え出した。それは推古から明治に至る各時代の民を主人公にし、大体三十余りの短篇を時代順に連ねた長篇だった。

僕は火の粉の舞い上るのを見ながら、ふと宮城の前にある或銅像を思い出した。この銅像はかつちゆう甲冑またがを着、忠義の心そのものように高だかと馬の上に跨またがっていた。しかし彼の敵だったのは、――

「嘘うそ！」

僕は又遠い過去から目まぢか近い現代へすべり落ちた。そこへ幸いにも来合せたのは或先輩の彫刻家だった。彼は不相あいかわらず変天びろうど鷲絨じゆうじゆうの服を着、短やぎひげい山羊そ髯ひげを反そらせていた。僕は椅子から立ち上り、彼のさし出した手を握った。（それは僕の習慣ではない、パリやベルリンに半生を送った彼の習慣に従ったのだった）が、彼の手は不思議にも爬はちゆうるい虫類ちゆうるいの皮膚のように湿っていた。

「君はここに泊っているのですか？」

「ええ、……」

「仕事をしに？」

「ええ、仕事もしているのです」

彼はじつと僕の顔を見つめた。僕は彼の目の中に探偵に近い表情を感じた。

「どうです、僕の部屋へ話しに来ては？」

僕は挑戦的に話しかけた。（この勇氣に乏しい癖に忽ち挑戦的態度をとるのは僕の悪癖の一つだった）すると彼は微笑しながら、「どこ、君の部屋は？」と尋ね返した。

僕等は親友のように肩を並べ、静かに話している外国人たちの

中を僕の部屋へ帰って行つた。彼は僕の部屋へ来ると、鏡を後ろにして腰をおろした。それからいろいろのことを話し出した。いろいろのことを？——しかし大抵は女の話だった。僕は罪を犯した為に地獄に堕ちた一人に違ひなかつた。が、それだけに悪徳の話は愈僕を憂鬱にした。僕は一時的清教徒になり、それ等の女を嘲り出した。

「Sさんの唇を見給え。あれは何人も接吻の為に……」

僕はふと口を噤み、鏡の中に彼の後ろ姿を見つめた。彼は丁度耳の下に黄いろい膏薬を貼りつけていた。

「何人も接吻の為に？」

「そんな人のように思いますがね」

彼は微笑して頷うなずいていた。僕は彼の内心では僕の秘密を知る為に絶えず僕を注意しているのを感じた。けれどもやはり僕等の話は女のことを離れなかった。僕は彼を憎むよりも僕自身の気の弱いのを恥じ、愈憂鬱にならずにはいられなかった。

やっと彼の帰った後、僕はベッドの上に転がったまま、「暗夜行路」を読みはじめた。主人公の精神的闘争は一々僕には痛切だった。僕はこの主人公に比べると、どのくらい僕の阿呆あほうだったかを感じ、いつか涙を流していた。同時に又涙は僕の気もちにいつか平和を与えていた。が、それも長いことではなかった。僕の右の目はもう一度半透明の齒車を感じ出した。齒車はやはりまわりながら、次第に数を殖やして行った。僕は頭痛のはじまることを

恐れ、枕もとに本を置いたまま、○・八グラムのヴェロナアルを
嘸^のみ、とにかくぐっすり眠ることにした。

けれども僕は夢の中に或プウルを眺めていた。そこには又男^{なんに}
女^よの子供たちが何人も泳いだりもぐったりしていた。僕はこの
プウルを後ろに向うの松林へ歩いて行つた。すると誰か後ろから
「おとうさん」と僕に声をかけた。僕はちよつとふり返り、プウ
ルの前に立つた妻を見つけた。同時に又烈しい後悔を感じた。

「おとうさん、タオルは？」

「タオルはいらない。子供たちに気をつけるのだよ」

僕は又歩みをつづけ出した。が、僕の歩いているのはいつかプ
ラットフォオムに変わっていた。それは田舎の停車場だったと見え、

長い生け垣のあるプラットフォオムだった。そこには又Hと云う大学生や年をとった女も佇んでいた。彼等は僕の顔を見ると、僕の前に歩み寄り、口々に僕へ話しかけた。

「大火事でしたわね」

「僕もやつと逃げて来たの」

僕はこの年をとった女に何か見覚えのあるように感じた。のみならず彼女と話していることに或愉快的興奮を感じた。そこへ汽車は煙をあげながら、静かにプラットフォオムへ横づけになった。僕はひとりこの汽車に乗り、両側に白い布を垂らした寝台の間を歩いて行つた。すると或寝台の上にミイラに近い裸体の女が一人こちらを向いて横になっていた。それは又僕の復讐の神、——或

狂人の娘に違いなかつた。……

僕は目を醒さますが早いか、思わずベッドを飛び下りていた。僕の部屋は不変電燈の光に明るかつた。が、どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えていた。僕は戸をあけて廊下へ出、前の炉の前へ急いで行つた。それから椅子に腰をおろしたまま、覚おぼ束つかない炎を眺め出した。そこへ白い服を着た給仕が一人焚たき木を加えに歩み寄つた。

「何時？」

「三時半ぐらいでございます」

しかし向うのロツビイの隅には亜米利加人らしい女が一人何か本を読みつづけた。彼女の着ているのは遠目に見ても緑いろのド

レッスに違いなかった。僕は何か救われたのを感じ、じつと夜のあけるのを待つことにした。長年の病苦に悩み抜いた揚句、静かに死を待っている老人のように。……

四 まだ？

僕はこのホテルの部屋にやつと前の短篇を書き上げ、或雑誌に送ることにした。もつと尤も僕の原稿料は一週間の滞在費にも足りないものだった。が、僕は僕の仕事を片づけたことに満足し、何か精神的強壯剤を求める為に銀座の或本屋へ出かけることにした。

冬の日の当たったアスファルトの上には紙屑かみくずが幾つもころがっ

ていた。それらの紙屑は光の加減か、いずれも薔薇ばらの花にそっくりだった。僕は何ものかの好意を感じ、その本屋の店へはいつて行った。そこもまたふだんよりも小綺麗こぎれいだった。唯目金めがねをかけた小娘が一人何か店員と話していたのは僕には気がかりにならないこともなかった。けれども僕は往来に落ちた紙屑の薔薇の花を思い出し、「アナトオル・フランスの対話集」や「メリメエの書簡集」を買うことにした。

僕は二冊の本を抱え、或カツフエへはいつて行った。それから一番奥のテエブルの前に珈琲コーヒーの来るのを待つことにした。僕に向うには親子らしい男女なんによが二人坐っていた。その息子は僕よりも若かったものの、殆ど僕にそっくりだった。のみならず彼等は

恋人同志のように顔を近づけて話し合っていた。僕は彼等を見て
いるうちに少くとも息子は性的にも母親に慰めを与えていること
を意識しているのに気づき出した。それは僕にも覚えのある親和
力の一例に違いなかった。同時に又現世げんぜを地獄にする或意志の一
例にも違いなかった。しかし、——僕は又苦しみに陥るのを恐れ、
丁度珈琲の来たのを幸い、「メリメエの書簡集」を読みはじめた、
彼はこの書簡集の中にも彼の小説の中のように鋭いアフォリズム
を閃ひらめかせていた。それ等のアフォリズムは僕の気もちをいつか鉄
のようにがんじょう 巖 畳 にし出した。（この影響を受け易いことも僕の
弱点の一つだった）僕は一杯の珈琲を飲み了おわった後、のち「何でも来
い」と云う気になり、さっさとこのカツフエを後ろにして行つた。

僕は往来を歩きながら、いろいろの飾り窓を覗いて行った。或額縁屋の飾り窓はベエトオヴェンの肖像画を掲げていた。それは髪を逆立てた天才そのものらしい肖像画だった。僕はこのベエトオヴェンを滑稽に感ぜずにはいられなかった。……

そのうちにふと出合ったのは高等学校以来の旧友だった。この応用化学の大学教授は大きい中折れ鞆かばんを抱え、片目だけまっ赤に血を流していた。

「どうした、君の目は？」

「これか？　これは唯の結膜炎さ」

僕はふと十四五年以来、いつも親和力を感じる度に僕の目も彼の目のように結膜炎を起すのを思い出した。が、何とも言わなか

った。彼は僕の肩を叩き、僕等の友だちのことを話し出した。それから話をつづけたまま、或カツフエへ僕をつれて行った。

「久しぶりだなあ。朱舜水しゆしゆんすいの建碑式以来だろう」

彼は葉巻に火をつけた後、大理石のテエブル越しにこう僕に話しかけた。

「そうだ。あのシユシユン……」

僕はなぜか朱舜水と云う言葉を正確に発音出来なかった。それは日本語だっただけにちよつと僕を不安にした。しかし彼は無頓着にいろいろのことを話して行った。Kと云う小説家のことを、彼の買ったブル・ドッグのことを、リウイサイトと云う毒瓦斯ガスのことを……

「君はちつとも書かないようだね。『点鬼簿』と云うのは読んだけれども。……あれは君の自叙伝かい？」

「うん、僕の自叙伝だ」

「あれはちよつと病的だったぜ。この頃体は善いいのかい？」

「不相変薬ばかり嚙んでいる始末だ」

「僕もこの頃は不眠症だがね」

「僕も？——どうして君は『僕も』と言うのだ？」

「だって君も不眠症だって言うじゃないか？　不眠症は危険だぜ。」

……」

彼は左だけ充血した目に微笑に近いものを浮かべていた。僕は返事をする前に「不眠症」のシヨウの発音を正確に出来ないのを

感じ出した。

「氣違いの息子には当り前だ」

僕は十分とたたないうちにひとり又往来を歩いて行つた。アスファルトの上に落ちた紙屑は時々僕等人間の顔のようにも見えな
いことはなかつた。すると向うから断髪にした女が一人通りかか
つた。彼女は遠目には美しかつた。けれども目の前へ来たのを見
ると、小皺こじわのある上に醜い顔をしていた。のみならず妊娠してい
るらしかつた。僕は思わず顔をそむけ、広い横町を曲つて行つた。
が、暫らく歩いているうちに痔じの痛みを感じ出した。それは僕に
は坐浴より外に癒なおすことの出来ない痛みだつた。

「坐浴、——ベエトオヴェンもやはり坐浴をしていた。……」

坐浴に使う硫黄いおうの匂においは忽ち僕の鼻を襲い出した。しかし勿論往來にはどこにも硫黄は見えなかった。僕はもう一度紙屑の薔薇の花を思い出しながら、努めてしつかりと歩いて行つた。

一時間ばかりたつた後、僕は僕の部屋にとじこもつたまま、窓の前の机に向かい、新らしい小説にとりかかっていた。ペンは僕にも不思議だつたくらい、ずんずん原稿用紙の上を走つて行つた。しかしそれも二三時間の後には誰か僕の目に見えないものに抑えられたようにとまってしまった。僕はやむを得ず机の前を離れ、あちこちと部屋の中を歩きまわつた。僕の誇大妄想もうぞうはこう云う時に最も著しかった。僕は野蛮な歓びの中に僕には両親もなければ妻子もない、唯僕のペンから流れ出した命だけあると云う気に

なっていた。

けれども僕は四五分の後、電話に向わなければならなかった。電話は何度返事をして、唯何か曖昧あいまいな言葉を繰り返して伝えるばかりだった。が、それはともかくもモオルと聞えたのに違いなかった。僕はとうとう電話を離れ、もう一度部屋の中を歩き出した。しかしモオルと云う言葉だけは妙に気になってならなかった。

「モオル——Mole……」

モオルは鼯もぐらもち鼠もちと云う英語だった。この聯想れんそうも僕には愉快ではなかった。が、僕は二三秒の後、Moleを *la mort* に綴り直した。ラ・モオルは、——死と云う仏蘭西語は忽ち僕を不安にした。

死は姉の夫に迫っていたように僕にも迫っているらしかった。けれども僕は不安の中にも何か可笑しおかさを感じていた。のみならずいつか微笑していた。この可笑しさは何の為に起るか？——それは僕自身にもわからなかった。僕は久しぶりに鏡の前に立ち、ともに僕の影と向い合った。僕の影も勿論もちろん微笑していた。僕はこの影を見つめているうちに第二の僕のことを思い出した。第二の僕、——独逸人の所謂いわゆる Doppel gänger は仕合せにも僕自身に見えたことはなかった。しかし亜米利加の映画俳優になったK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけていた。（僕は突然K君の夫人に「先せんだって達だはつい御挨拶もしませんで」と言われ、当惑したことを覚えている）それからもう故人になった或隻脚かたあしの翻

訳家もやはり銀座の或煙草屋に第二の僕を見かけていた。死は或は僕よりも第二の僕に来るのかも知れなかつた。若し又僕に來たとしても、——僕は鏡に後ろを向け、窓の前の机へ歸つて行つた。四角に凝灰岩を組んだ窓は枯芝や池を覗か^{のぞ}せていた。僕はこの庭を眺めながら、遠い松林の中に焼いた何冊かのノオト・ブックや未完成の戯曲を思い出した。それからペンをとり上げると、もう一度新しい小説を書きはじめた。

五 赤^{しゃつこう}光

日の光は僕を苦しめ出した。僕は實際鼯鼠のように窓の前へカ

アテンをおろし、昼間も電燈をともしたまま、せつせと前の小説をつづけて行つた。それから仕事に疲れると、テエヌの英吉利文学史をひろげ、詩人たちの生涯に目を通した。彼等はいずれも不幸だった。エリザベス朝の巨人たちさえ、——一代の学者だったベン・ジョンソンさえ彼の足の親指の上に羅馬ローマとカルセエジとの軍勢の戦いを始めるのを眺めたほど神経的疲労に陥っていた。僕はこう云う彼等の不幸に残酷な悪意に充ち満ちた歡びを感じずにはいられなかった。

或東かぜの強い夜、（それは僕には善い徴しるしだった）僕は地下室を抜けて往来へ出、或老人を尋ねることにした。彼は或聖書会社の屋根裏にたった一人小使いをしながら、祈祷や読書に精進して

いた。僕等は火鉢に手をかざしながら、壁にかけた十字架の下にいろいろのことを話し合った。なぜ僕の母は発狂したか？ なぜ僕の父の事業は失敗したか？ なぜ又僕は罰せられたか？——それ等の秘密を知っている彼は妙に嚴かな微笑を浮かべ、いつまでも僕の相手をした。のみならず時々短い言葉に人生のカリカチュアを描いたりした。僕はこの屋根裏の隠者を尊敬しない訣には行かなかつた。しかし彼と話しているうちに彼もまた親和力の為に動かされていることを発見した。——

「その植木屋の娘と云うのは器量も善いし、氣立も善いし、——それはわたしに優しくしてくれるのです」

「いくつ？」

「こととして十八です」

それは彼には父らしい愛であるかも知れなかった。しかし僕は彼の目の中に情熱を感じずにはいられなかった。のみならず彼の勧めた林檎はいつか黄ばんだ皮の上へ一角獣の姿を現していた。

(僕は木目もくめや珈琲茶碗の亀裂ひびに度たび神話的動物を発見していた) 一角獣は麒麟きりんに違ちがいなかつた。僕は或敵意のある批評家の僕を「九百十年代の麒麟児」と呼んだのを思い出し、この十字架のかかった屋根裏も安全地帯ではないことを感じた。

「如何いかがですか、この頃は？」

「不相変神経しんけいばかり苛いら々いらしてね」

「それは薬でも駄目ですよ。信者になる気はありませんか？」

「若し僕でもなれるものなら……」

「何もむずかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子のキリス基督トを信じ、基督の行った奇蹟きせきを信じさえすれば……」

「悪魔を信じることは出来ませんがね。……」

「ではなぜ神を信じないのです？ 若し影を信じるならば、光も信じずにはいられないでしょう？」

「しかし光のない暗やみもあるでしょう」

「光のない暗とは？」

僕は黙るより外はなかった。彼もまた僕のように暗の中を歩いていた。が、暗のある以上は光もあると信じていた。僕等の論理の異なるのは唯こう云う一点だけだった。しかしそれは少くとも僕

には越えられない溝みぞに違いなかった。……

「けれども光は必ずあるのです。その証拠には奇蹟があるのですから。……奇蹟などと云うものは今でも度たび起っているのですよ」

「それは悪魔の行う奇蹟は。……」

「どうして又悪魔などと云うのです？」

僕はこの一二年の間、僕自身の経験したことを彼に話したい誘惑を感じた。が、彼から妻子に伝わり、僕もまた母のように精神病院にはいることを恐れない訣にも行かなかつた。

「あすこにあるのは？」

この遅たくましい老人は古い書棚をふり返り、何か牧羊神ぼくようじんらしい表

情を示した。

「ドストエフスキイ全集です。『罪と罰』はお読みですか？」

僕は勿論十年前にも四五冊のドストエフスキイに親しんでいたが、偶然（？）彼の言った『罪と罰』と云う言葉に感動し、この本を貸して貰った上、前のホテルへ帰ることにした。電燈の光に輝いた、人通りの多い往来はやはり僕には不快だった。殊に知り人に遇うことは到底堪えられないのに違いなかった。僕は努めて暗い往来を選び、盗^{ぬすびと}人のように歩いて行った。

しかし僕は暫らくの後、いつか胃の痛みを感じ出した。この痛みを止めるものは一杯のウイスキーのあるだけだった。僕は或バアを見つつけ、その戸を押しはいろいろとした。けれども狭いバア

の中には煙草の煙の立ちこめた中に芸術家らしい青年たちが何人も群がって酒を飲んでいた。のみならず彼等のまん中には耳隠しに結った女が一人熱心にマンドリンを弾ひきつづけていた。僕は忽ち当惑を感じ、戸の中へはいらずに引き返した。するといつか僕の影の左右に揺れているのを発見した。しかも僕を照らしているのは無気味にも赤い光だった。僕は往來に立ちどまった。けれども僕の影は前のように絶えず左右に動いていた。僕は怯おず怯おずふり返り、やっとこのバアの軒に吊つった色硝子ガラスのランタアンを発見した。ランタアンは烈しい風の為に徐おもむろに空中に動いていた。：

僕の次にはいったのは或地下室のレストオランだった。僕はそ

このバアの前に立ち、ウイスキーを一杯注文した。

「ウイスキーを？ Black and White ばかりでございますが、……」

僕は曹達水ソオダの中にウイスキーを入れ、黙って一口ずつ飲みはじめた。僕の隣となりには新聞記者らしい三十前後の男が二人何か小声に話していた。のみならず仏蘭西語を使っていた。僕は彼等に背中を向けたまま、全身に彼等の視線を感じた。それは実際電波のように僕の体にこたえるものだった。彼等は確かに僕の名を知り、僕の噂うわさをしているらしかった。

「 [Bien……tre`s mauvais……pourquoi ?……] 」

「 Pourquoi ?……Je diable est mort !……] 」

「 Oui, oui……d'enfer……] 」

僕は銀貨を一枚投げ出し、（それは僕の持っている最後の一枚の銀貨だった）この地下室の外へのがれることにした。夜風の吹き渡る往来は多少胃の痛みの薄らいだ僕の神経を丈夫にした。僕はラスコルニコフを思い出し、何ごとも懺悔ざんげしたい欲望を感じた。が、それは僕自身の外にも、——いや、僕の家族の外にも悲劇を生じるのに違いなかった。のみならずこの欲望さえ真実かどうかは疑わしかった。若し僕の神経さえ常人のように丈夫になれば、——けれども僕はその為にはどこかへ行かなければならなかった。マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、……

そのうちに或店の軒に吊った、白い小型の看板は突然僕を不安にした。それは自動車のタイヤアに翼のある商標を描いたものだ

った。僕はこの商標に人工の翼を手たよりにした古代の希臘人を思
い出した。彼は空中に舞い上った揚句、太陽の光に翼を焼かれ、
とうとう海中に溺死できししていた。マドリッドへ、リオへ、サマルカ
ンドへ、——僕はこう云う僕の夢を嘲あざわら笑わない訣には行かなか
った。同時に又復ふくしゆう讐の神に追われたオレステスを考えない訣
にも行かなかった。

僕は運河に沿いながら、暗い往来を歩いて行つた。そのうちに
或郊外にある養父母の家を思い出した。養父母は勿もちろん論僕の帰る
のを待ち暮らしているのに違ひなかつた。恐らくは僕の子供たち
も、——しかし僕はそこへ帰ると、おのずから僕を束縛してしま
う或力を恐れずにはいられなかつた。運河は波立つた水の上に達だ

るまぶね
磨船をいっそう一艘横づけにしていた。その又達磨船は船の底から薄
い光を洩らしていた。そこにも何人かの男女なんによの家族は生活して
いるのに違いなかった。やはり愛し合う為に憎み合いながら。：
：が、僕はもう一度戦闘的精神を呼び起し、ウイスキーの酔いを
感じたまま、前のホテルへ帰ることにした。

僕は又机に向い、「メリメエの書簡集」を読みつづけた。それ
は又いつの間にか僕に生活力を与えていた。しかし僕は晩年のメ
リメエの新教徒になつていたことを知ると、俄にわかに仮面のかげに
あるメリメエの顔を感じ出した。彼もまたやはり僕等のように暗
の中を歩いている一人だった。暗の中を？——「暗夜行路」はこ
う云う僕には恐しい本に変わりはじめた。僕は憂鬱を忘れる為に

「アナトオル・フランスの対話集」を読みはじめた。が、この近代の牧羊神もやはり十字架を荷になつていた。……

一時間ばかりたつた後、給仕は僕に一束の郵便物を渡しに顔を出した。それ等の一つはライプツィツヒの本屋から僕に「近代の日本の女」と云う小論文を書けと云うものだった。なぜ彼等は特に僕にこう云う小論文を書かせるのであろう？ のみならずこの

英語の手紙は「我々は丁度日本画のように黒と白の外に色彩のない女の肖像画でも満足である」と云う肉筆のP・Sを加えていた。僕はこう云う一行に **Black and White** と云うウイスキイの名を思

い出し、ずたずたにこの手紙を破ってしまった。それから今度は手当り次第に一つの手紙の封を切り、黄いろい書簡箋せんに目を通し

た。この手紙を書いたのは僕の知らない青年だった。しかし二三行も読まないうちに「あなたの『地獄変』は……」と云う言葉は僕を苛立たせずには措かなかつた。三番目に封を切った手紙は僕の甥おいから来たものだった。僕はやつと一息つき、家事上の問題などを読んで行つた。けれどもそれさえ最後へ来ると、いきなり僕を打ちのめした。

「歌集『赤光』の再版を送りますから……」

赤光！ 僕は何ものかの冷笑を感じ、僕の部屋の外へ避難することにした。廊下には誰も人かげはなかつた。僕は片手に壁を抑え、やつとロツビイへ歩いて行つた。それから椅子に腰をおろし、とにかく巻煙草に火を移すことにした。巻煙草はなぜかエエア・

シツプだった。（僕はこのホテルへ落ち着いてから、いつもスタアばかり吸うことにしていた）人工の翼はもう一度僕の目の前へ浮かび出した。僕は向うにいる給仕を呼び、スタアを二箱貰うことにした。しかし給仕を信用すれば、スタアだけは生憎品切れあいにくだった。

「エエア・シツプならばございますが、……」

僕は頭を振ったまま、広いロツビイを眺めまわした。僕の向うには外国人が四五人テエブルを囲んで話していた。しかも彼等の中の一人、——赤いワン・ピースを着た女は小声に彼等と話しながら、時々僕を見ているらしかった。

「Mrs. Townshead……」

何か僕の目に見えないものはこう僕に囁いて行つた。ミセス・タウンズヘッドなどと云う名は勿論僕の知らないものだった。たとい向うにいる女の名にしても、——僕は又椅子から立ち上り、発狂することを恐れながら、僕の部屋へ帰ることにした。

僕は僕の部屋へ帰ると、すぐに或精神病院へ電話をかけるつもりだった。が、そこへはいることは僕には死ぬことに変らなかつた。僕はさんざんためらつた後、この恐怖を紛らす為に「罪と罰」を読みはじめた。しかし偶然開いた頁は「カラマゾフ兄弟」の一節だった。僕は本を間違えたのかと思ひ、本の表紙へ目を落した。「罪と罰」——本は「罪と罰」に違ひなかつた。僕はこの製本屋の綴じ違えに、——その又綴じ違えた頁を開いたことに運命の指

の動いているのを感じ、やむを得ずそこを読んで行つた。けれども一頁も読まないうちに全身が震えるのを感じ出した。そこは悪魔に苦しめられるイヴァンを描いた一節だつた。イヴァンを、ストリントベルグを、モオパスサンを、或はこの部屋にいる僕自身を。……

こう云う僕を救うものは唯眠りのあるだけだつた。しかし催眠剤はいつの間にか一包みも残らずになくなつていた。僕は到底眠らずに苦しみつづけるのに堪えなかつた。が、絶望的な勇氣を生じ、珈琲コーヒーを持って来て貰つた上、死にももの狂いにペンを動かすことにした。二枚、五枚、七枚、十枚、——原稿は見る見る出来上つて行つた。僕はこの小説の世界を超自然の動物に満たしてい

た。のみならずその動物の一匹に僕自身の肖像画を描いていた。けれども疲労は徐ろに僕の頭を曇らせはじめた。僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上へ仰向けになった。それから四五十分間は眠ったらしかかった。しかし又誰か僕の耳にこう云う言葉を囁いたのを感じ、忽ち目を醒まして立ち上った。

「Le diable est mort」

凝灰岩の窓の外はいつか冷えびえと明けかかっていた。僕は丁度戸の前に佇み、誰もいない部屋の中を眺めまわした。すると向うの窓硝子は斑まだらに外気に曇った上に小さい風景を現していた。それは黄ばんだ松林の向うに海のある風景に違いなかった。僕は怯ず怯ず窓の前へ近づき、この風景を造っているものは実は庭の

枯芝や池だったことを発見した。けれども僕の錯覚はいつか僕の家に対する郷愁に近いもの呼び起していた。

僕は九時にでもなり次第、或雑誌社へ電話をかけ、とにかく金の都合をした上、僕の家へ帰る決心をした。机の上に置いた鞆かばんの中へ本や原稿を押しこみながら。

六 飛行機

僕は東海道線の或停車場からその奥の或避暑地へ自動車を飛ばした。運転手はなぜかこの寒さに古いレエン・コートをひっかけていた。僕はこの暗合を無気味に思い、努めて彼を見ないように

窓の外へ目をやることにした。すると低い松の生えた向うに、——恐らくは古い街道に葬式が——
 一列通るのをみつけた。白張りの提ち
 灯ようちんや竜燈りゆうとうはその中に加わつてはいないらしかつた。が、
 金銀の造花の蓮は静かに輿こしの前後に揺ゆらいで行つた。……

やつと僕の家へ歸つた後のち、僕は妻子や催眠薬の力により、二三日は可也かなり平和に暮らした。僕の二階は松林の上にかすかに海を覗かせていた。僕はこの二階の机に向かい、鳩からすの声を聞きながら、午前だけ仕事をすることにした。鳥は鳩や鴉からすの外に雀も縁側へ舞いこんだりした。それもまた僕には愉快だつた。「喜雀堂きしゃくに入る」——僕はペンを持ったまま、その度にこんな言葉を思い出した。

或生暖かい曇天の午後、僕は或雜貨店へインクを買いに出かけて行つた。するとその店に並んでいるのはセピア色のインクばかりだつた。セピア色のインクはどのインクよりも僕を不快にするのを常としていた。僕はやむを得ずこの店を出、人通りの少ない往來をぶらぶらひとり歩いて行つた。そこへ向うから近眼らしい四十前後の外国人が一人肩を聳か^{そびや}せて通りかかつた。彼はここに住んでいる被害妄想狂の瑞典^{スウェーデン}人だつた。しかも彼の名はストリントベルグだつた。僕は彼とすれ違ふ時、肉体的に何かこたえるのを感じた。

この往來は僅かに二三町だつた。が、その二三町を通るうちに丁度半面だけ黒い犬は四度も僕の側を通つて行つた。僕は横町を

曲りながら、ブラック・アンド・ホワイトのウイスキーを思い出した。のみならず今のストリントベルグのタイも黒と白だったのを思い出した。それは僕にはどうしても偶然であるとは考えられなかった。若し偶然でないとすれば、——僕は頭だけ歩いているように感じ、ちよつと往来に立ち止まった。道ばたには針金の柵さくの中にかすかに虹の色を帯びた硝子の鉢が一つ捨ててあった。この鉢は又底のまわりに翼らしい模様を浮き上らせていた。そこへ松の梢こずえから雀が何羽も舞い下さがつて来た。が、この鉢のあたりへ来ると、どの雀も皆言い合わせたように一度に空中へ逃げのぼつて行つた。……

僕は妻の実家へ行き、庭先の籐椅子とういすに腰をおろした。庭の隅の

金網の中には白いレグホン種の鶏が何羽も静かに歩いていて。それから又僕の足もとには黒犬も一匹横になつていた。僕は誰にもわからない疑問を解こうとあせりながら、とにかく外見だけは冷やかに妻の母や弟と世間話をした。

「静かですね、ここへ来ると」

「それはまだ東京よりもね」

「ここでもうるさいことはあるのですか？」

「だってここも世の中ですもの」

妻の母はこう言つて笑つていた。実際この避暑地もまた「世の中」であるのに違ひなかつた。僕は僅かに一年ばかりの間^つにどのくらいここにも罪悪や悲劇の行われているかを知り^{つく}悉していた。

徐ろに患者を毒殺しようとした医者、養子夫婦の家に放火した老婆、妹の資産を奪おうとした弁護士、——それ等の人々の家を見ることは僕にはいつも人生の中に地獄を見ることに異らなかつた。「この町には氣違いが一人いますね」

「Hちゃんでしょう。あれは氣違いじゃないのですよ。莫迦ばかになつてしまつたのですよ」

「早発性痴呆ちほうと云うやつですね。僕はあいつを見る度に氣味が悪くつてたまりません。あいつはこの間もどう云う量見か、馬頭ばとうか観世音んぜおんの前にお時宜じぎをしていました」

「氣味が悪くなるなんて、……もつと強くならなければ駄目ですよ」

「兄さんは僕などよりも強いのだけれども、——」

無精髭を伸ばした妻の弟も寢床の上に起き直ったまま、いつもの通り遠慮勝ちに僕等の話に加わり出した。

「強い中に弱いところもあるから。……」

「おやおや、それは困りましたね」

僕はこう言った妻の母を見、苦笑しない訣には行かなかつた。

すると弟も微笑しながら、遠い垣の外の松林を眺め、何かうつとりと話しつつづけた。（この若い病後の弟は時々僕には肉体を脱した精神そのもののように見えるのだつた）

「妙に人間離れをしているかと思えば、人間的欲望もずいぶん烈しいし、……」

「善人かと思えば、悪人でもあるしさ」

「いや、善悪と云うよりも何かもつと反対なものが、……」

「じや大人の中に子供もあるのだろう」

「そうでもない。僕にははつきりと言えないけれど、……電気の両極に似ているのかな。何しろ反対なものを一しよに持っている」

そこへ僕等を驚かしたのは烈しい飛行機の響きだった。僕は思わず空を見上げ、松の梢こずえに触れないばかりに舞い上った飛行機を発見した。それは翼を黄いろに塗った。珍らしい単葉の飛行機だった。鶏や犬はこの響きに驚き、それぞれ八方へ逃げまわった。殊に犬は吠え立てながら、尾を捲いて縁の下へはいつてしまった。

「あの飛行機は落ちはしないか？」

「大丈夫。……兄さんは飛行機病と云う病氣を知っている？」

僕は巻煙草に火をつけながら、「いや」と云う代りに頭を振った。

「ああ云う飛行機に乗っている人は高空の空気ばかり吸っているものだから、だんだんこの地面の上の空気に堪えられないようになってしまふのだって。……」

妻の母の家を後ろにした後、僕は杖一つ動かさない松林の中を歩きながら、じりじり憂鬱になって行つた。なぜあの飛行機はほかへ行かずに僕の頭の上を通つたのであろう？　なぜ又あのホテルは巻煙草のエア・シツプばかり売っていたのであろう？　僕はいろいろの疑問に苦しみ、ひとげ人氣のない道を選よつて歩いて行つた。

海は低い砂山の向うに一面に灰色に曇っていた。その又砂山にはブランコのないブランコ台が一つ突っ立っていた。僕はこのブランコ台を眺め、忽ち絞首台を思い出した。実際又ブランコ台の上には鴉が二三羽とまっていた、鴉は皆僕を見ても、飛び立つけ気色しきさえ示さなかった。のみならずまん中にとまっていた鴉は大きいくちばし嘴を空へ挙げながら、確かに四たび声を出した。

僕は芝の枯れた砂土手に沿い、別荘の多い小みちを曲ることにした。この小みちの右側にはやはり高い松の中に二階のある木造の西洋家屋が一軒白じらと立っている筈だった。（僕の親友はこの家のことを「春のいる家」と称していた）が、この家の前へ通りかかると、そこにはコンクリイトの土台の上にバス・タツブが

一つあるだけだった。火事——僕はすぐにこう考え、そちらを見ないように歩いて行つた。すると自転車に乗つた男が一人まつすぐに向うから近づき出した。彼は焦茶いろの鳥打ち帽をかぶり、妙にじつと目を据えたまま、ハンドルの上へ身をかがめていた。

僕はふと彼の顔に姉の夫の顔を感じ、彼の目の前へ来ないうちに横の小みちへはいることにした。しかしこの小みちのまん中にも腐つたもぐらもち鼠の死骸が一つ腹を上にして転がっていた。

何ものかの僕を狙っていることは一足毎に僕を不安にし出した。そこへ半透明な齒車も一つずつ僕の視野を遮り出した。僕は愈いよいよ最後の時の近づいたことを恐れながら、頸くびすじをまつ直にして歩いて行つた。齒車は数の殖えるのにつれ、だんだん急にまわりはじ

めた。同時に又右の松林はひっそりと枝をかわしたまま、丁度細かい切りこガラスを透かして見るようになりはじめた。僕は動悸どうきの高まるのを感じ、何度も道ばたに立ち止まろうとした。けれども誰かに押されるように立ち止まることさえ容易ではなかった。……

三十分ばかりたつた後、僕は僕の二階に仰向けになり、じつと目をつぶったまま、烈しい頭痛をこらえていた。すると僕の眶まぶたの裏に銀色の羽根を鱗うろこのように畳んだ翼が一つ見えはじめた。それは実際網膜の上にはつきりと映っているものだった。僕は目をあいて天井を見上げ、勿論何も天井にはそんなものないことを確かめた上、もう一度目をつぶることにした。しかしやはり銀色の翼はちやんと暗い中に映っていた。僕はふとこの間乗った自動車の

ラデイエエタア・キャップにも翼のついていたことを思い出した。

……

そこへ誰か梯子段はしごだんを慌あわただしく昇つて来たかと思うと、すぐに又ばたばた駈け下りて行つた。僕はその誰かの妻だったことを知り、驚いて体を起すが早いか、丁度梯子段の前にある、薄暗い茶の間へ顔を出した。すると妻は突つ伏したまま、息切れをこらえていると見え、絶えず肩を震わしていた。

「どうした？」

「いえ、どうもしないのです。……」

妻はやつと顔を擡もたげ、無理に微笑して話しつづけた。

「どうもした訣ではないのですけれどもね、唯何だかお父さんが

死んでしまいそうな気がしたものですから。……」

それは僕の一生の中でも最も恐しい経験だった。——僕はもうこの先を書きつづける力を持っていない。こう云う気もちの中に生きているのは何とも言われない苦痛である。誰か僕の眠っているうちにそつと絞め殺してくれるものはないか？

青空文庫情報

底本：「河童・或る阿呆の一生」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年12月15日発行

1987（昭和62）年11月5日41刷

入力：蔣龍

校正：田中敬三

2009年3月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

齒車

芥川竜之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>